

生活 & 総合 navi

表紙裏 ● い〜め〜る

小室淑恵

特集

01 ● 地域からの発信
アクティブ・ラーニング最前線
～兵庫県たつの市の取り組み～

06 ● 収穫物でクッキング
ダイズを味わう! 5年

尾形 弘

08 ● 論壇 [座談会] 教科・生活科の中の動植物について
石井誠治・高槻成紀

12 ● 連載 おしえて! 藤井先生
研究と実践

藤井千春

13 (総合) 体験活動と表現活動のサイクルで、資質や能力を育む
～3年「調べよう! 見つけよう! 大野たんけん隊」の実践から～
佐藤千紘

16 (総合) 地域で働く人々から学ぶ
～3年 菜の花プロジェクトを通して～ 田矢聡子

19 ● 連載 ナカヤマヒロシのてだてだ⑩ 中山洋司

20 ● 連載 幼・保・小スロープ⑪
いなほ幼稚園(埼玉県三郷市) / 和田信行

22 ● 連載 特色ある実践を求めて 村川雅弘

24 ● 生活・総合への提言 大久保善邦

26 ● ご当地料理紹介 ほうとう 依田萬代

27 ● わが町オススメ行事 阿智神社藤まつり 新井俊亮

● いろいろ工夫して!

28 (まとめ編) すてき! わたしの町 高本誠治

30 ● 資料館へアクセス J 生命誌研究館 有馬えり奈

● わたしの学校の特徴

32 徳島県つるぎ町立貞光小学校 小倉健司

裏表紙 ● 連載 Dr. 小林のこれなあに? 小林辰至



い〜め〜る

K O M U R O Y O S H I E

小 室 淑 恵

株式会社ワーク・ライフバランス代表取締役社長。

2006年、株式会社ワーク・ライフバランスを設立。

「育児と仕事の調和プログラム armo (アルモ)」, 「介護と仕事の両立ナビ」, 「朝メール .com」などを開発。また携帯電話用サイト「小室淑恵の WLB 塾」をリリース。多種多様な価値観が受け入れられる社会をめざして邁進中。二児の母の顔をもつ。

著書多数。近著に『残業ゼロで好業績のチームに変わる 仕事を任せる新しいルール』(かんき出版), 『30歳からますます輝く女性になる方法 〜仕事も結婚も子育ても何もあきらめなくて大丈夫!』(マイナビ出版)。

産業競争力会議民間議員。中央教育審議会委員など複数の公務を兼任。



チームで仕事をこなす重要性

小学校低学年のときはとても活発な子でした。高学年になると、ある先生の雰囲気を感じ取ったことから変わりました。それまでは、「男女関係なく元気に発言することはいいことだ!」と思っていたのですが、高学年になると、「女の子はそういうことでは…」と思われていると感じ取ったのです。そのため、何が正解で、何を求められているのかわからなくなって悩んでしまいました。いろんな本を読んだり、テレビドラマを観たりしている中で、どうやら社会に出ると、男の子は企業が両手を広げて待っているけれど、女の子は仕事で頑張ると嫌われるらしいと勝手に悟ってしまったのです。

転機は大学時代に訪れます。猪口邦子さんの講演会で、「働いて子育てする消費者が増えると、商品やサービスにもその視点が求められる。」という話を聞き、「それならば、働きながら子育てすることは、迷惑ではなく、むしろ消費者に求められる商品やサービスをつくることにつながるんだ。」と考えるようになりました。

卒業後、化粧品会社で7年半働いてから、日本の働き方を根本から変えていくために、ワーク・ライフバランスコンサルティング

の会社を起業しました。そして、わたしたち自身が18時に帰るという残業禁止の仕事のやり方を実践しました。企業のコンサルティングをしていく耳にすることは、その部署のミッションを達成することが一番大切な仕事なのに、その他のことに追われて手がつけられない、大量の残業時間になってしまうということでした。それを解決するにはチームとして仕事をこなしていくことが重要なのです。まさに、チーム内全員の意識改革が必要です。学校はいかがでしょうか。

また、先生には、先生以外の職業の方とおおいに接点をもってもらいたいと思っています。そして子どもたちの将来の選択肢を広げていってほしいです。そのためには、学生時代の友人であったり、地域のコミュニティであったりという接点が必要になってきます。それには、余力をもって毎日、職場を退社しないとできません。平日のプラスαの時間で自分を成長させ、人脈を広げ、人生を豊かなものにすることで、魅力ある授業をつくり上げていけるのではないのでしょうか。是非、子どもにバイタリティ溢れた、笑顔向けられる先生になってもらえたらと思います。

特集

地域からの発信

アクティブ・ラーニング 最前線

ー兵庫県たつの市の取り組みー

新宮小学校 3年

総合的な学習の時間
の実践より

4月



まだ何もない3年空き教室

「ここを研究所にしたい！」
「『ひみつをさがそう、伝えよう』
をテーマにしよう。」

7月



「しんぐう自ぜん研究所」の

ひみつを **探** る

「研究所」として1学期の学習を整理

「もっともっと新しいコーナーをつくりたい！」
「本物の資料館や博物館はどうなっているのかな？」

1月



学習の成果が見事に蓄積された！

➡発信の場へ

「〇〇さんを招待したいな。」

「新宮の自然のひみつを絶対みんなに伝えたい！」
「この場所で、これを使って説明したいんだ。」

『しんぐう自ぜん研究所』のコンセプト

・空き教室を活用し、新宮の自然のよさを発信する場。

兵庫県たつの市新宮町は、自然環境が豊かであるにもかかわらず、子どもたちは自然を生かした体験が不足しています。

そこで、学級減による空き教室を活用して、新宮の自然のよさを地域へ発信する「自ぜん研究所」をつくりたいと考えました。

また、3年生は、理科、社会科、総合的な学習の時間を初めて学習します。初めてだからこそ、まず学ぶ楽しさを理解させる必要があります。そこで、それらに直結している「生活科」の学びを重視し、それを発展、深化させるために、体験的な学習を取り入れ、単元を構築しました。子どもの学ぶ意識を、2年生から3年生へとスムーズにつなぐための手立てがポイントです。



石堂 裕 教諭



学校紹介

そうめん「損保の糸」で有名な損保川にほど近く、自然豊かな環境に恵まれた新宮小学校。「自ら学び、心豊かにたくましく生きる児童の育成」を学校教育目標に、日々取り組んでいます。児童数225名。藤川政之校長。

この実践は、

- *「アクティブ・ラーニング」の考えを積極的に活用
- *「ESD教育」の視点をもち、持続的、継続的な学習を形成
- =地域貢献、地域活性化への取り組み(学びの還元)を行っています。

➡次ページから全容を紹介します。

「学び」を “つなぐ” 「しんぐう自ぜん研究所」の全容

最も大切なのは「前年度の当該学年はどんな体験活動をしていたか」を把握することです。前年度までの活動を効果的につなぎ、継承、発展させることで、学校カリキュラムとして重要な柱になっていくことが期待されます。

これが学習
の基本！

POINT

総合的な学習を初めて経験する3年生の子もたちは、「総合」へのイメージをもちづらいです。そこで、生活科で培った「気付きの質を高める」ことを「探究的な学び」へつなぐという観点を教師がもち、その上で理科や社会科の学習をきっかけにして単元をスタートすることをおすすめします。そうすることで、子どもたちの気付きや疑問を引き出しやすくなるからです。

きっかけ

生活科で、町にある店についてはある程度把握できています。それを受けて、3年生では、働く人の思い、特産品に注目させるよう、はたらきかけました。学習のつながりを保ちつつ、社会科的な観点から、より具体的に町の特徴をとらえさせようというねらいです。

その過程で、子どもたちは「鮎」の看板が多いことに気付きました。そこで、アユについて疑問をもった子どもが多いことから、そのことを課題にし、揖保川の名産であるアユについて調べていきました。



アユの放流体験の様子

社会科

理科の学習(チョウの飼育)では、卵からの飼育を通して変態の様子を学びます。校庭で見つけたアゲハチョウの飼育を通して、羽化の瞬間などそれぞれの場面を体験することで、生き物の不思議や命の存在、大切に気付くことができます。

「卵を産んだよ。」「不思議なことがたくさんあるね。」「聞いてみたい!」という発言から、専門家に話を伺い、飼育活動に生かすことで、より生き物に対して親しみをもつことができ、活動が深まります。



「ここをよく見てごらん」

理 科

「自ぜん研究所」の様々な活動（ここから派生した活動がまだまだありますが、主なものを紹介します）

1 水生生物調査



「アユのいる川（揖保川）って本当にきれいな？」

3 地域の方とうち米の田植え



「揖保川の水がきれいなら、田んぼの水もきれいなのかな？」

2 カイコの飼育



「カイコとアゲハ、似ているよ!」



※卵から飼育。アゲハチョウと同時期のため、比較することで様々な気付きが得られます。学習の中でこの地域で養蚕業が盛んだったことに気付いたのがきっかけ。

4 コヤスノキの挿し木を体験



「たつの市の木なんだって。」

※カイコを広めた生物学者が発見した木ということに気付き、地元の人ほとんど知らないことから、PRしようということに。

気付きを“つなぐ”～思考スキルを意識して～

学習活動を想定して重視した思考スキル

思考スキル	定義	思考ツール例
比較する	共通点と相違点をさがす。	ベン図、座標軸
分類する	特徴によって仲間分けをする。	Xチャート、Yチャート、マトリックス
関連付ける	事柄を既習事項や経験と結び付ける。	コンセプトマップ、イメージマップ
構造化する	複数の事柄を関係付ける。	ピラミッドチャート、ステップシート
多面的にみる	複数の視点から考える。	フィッシュボーン
理由付ける	根拠を説明する。	くらげチャート、くま手チャート、データチャート
評価する	根拠をもとに自分の意見を述べる。	PMIシート

重視した七つの思考スキル

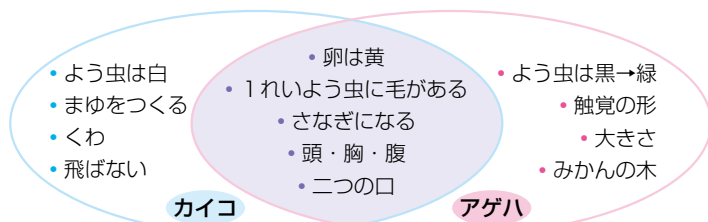
学習活動を確かな学びにつなげるためには、体験活動後の「学びの時間」がポイントです。その時間をより効果的にするためには、“思考スキル”を意識することが重要です。左の表のうち、最も重視したのが「比較する」というスキルです。

学習活動例

その1

●カイコとアゲハ

カイコとアゲハの比較



全員で協力してまとめたベン図

【学習の流れ】

- ① 個人で気付きを整理し、「ベン図」にまとめる。
- ② グループで共有し、ホワイトボードにまとめる。
- ③ 全員で共有し、整理、まとめを行って最終的にクラスの「ベン図」にまとめる。

全員で共有してまとめることで、客観性に欠けるものを省いたり、考え付かなかったものを補完したりすることができ、より具体的になります。そのプロセスを子どもが体感することが非常に有効です。また、比較しながらまとめることで、カイコ、アゲハ、それぞれをより詳しく知ろうという気持ちが高まり、効果的です。そして、「研究所」の“研究員”として、比較した結果をもとに展示コーナーをつくっていきました。

学習活動例

その2

●うるち米と古代米

社会科の時間に、「紫黒米^{しこくまい}」という米がたつの市の名産だということを知り、調べていくうちに、育ててみようということになりました。そこで、一般的なうるち米と紫黒米を一緒に育てて、自分たちで比べてみました。

※紫黒米は古代米の一種



▲うるち米と紫黒米を比べる

子どもたちが気付いた様々なこと

紫黒米の水田を無農薬にしたことで、生息できる生き物の種類や数が、うるち米と比べてかなり多いことに気付いた。さらには、収穫時に稲の丈、切り株の色、米粒の色、大きさ、味など、様々なことに気付いた。それが発展して、黒大豆と普通のサイズの違い、色の成分（アントシアニン）の違いにも気付くことができた。

アクティブ・ラーニングのツボ

・学習形態の工夫（議論したくなる雰囲気づくり）

子どもが主体的に自分の考えを伝え合おうとする意欲をもつことが大切である。

具体的には…

学習活動例その1のように、個人→グループ→全体と状況を変えていく（毎時間これを行うのが望ましい）。自主的な発言が苦手な子も、少人数の中で認められることで、みんなに伝えようとする意欲をもつことができる。また、とにかく発表させるといふばかりでなく、アクティブ・ラーニングにおいては、自分と対話することも非常に重要であるため（内的な活発性）、じっくりと自分の考えを整理する時間を確保するようにしたい。

「疑問」を“つなぐ”

～体験によって疑問が生まれ、さらなる体験へとつながる～

① カイコ農家を訪ねて

● ステップ1

[体験活動]

- ・カイコの飼育
- ・専門家の話

● ステップ2

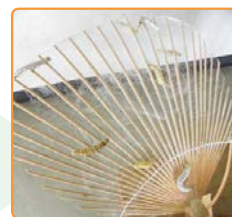
新たな疑問

『昔のカイコ農家の様子はどんなだったのだろう?』

カイコを育てていく過程で、昔カイコが飼われていた頃の様子が知りたいという思いが出てきました。しかし、近くにはそれを知っている人が誰もいません。そこで、カイコが飼われている施設（かいこの里：兵庫県養父市）を訪ねました。



専門家に教えてもらっての糸車体験



うちわづくり（カイコに糸を張らせ、最終的にはあおげるくらいまでびっしり糸が張られる）

● ステップ3

[体験活動]

- ・「かいこの里」を訪ねる
- ・「かいこの里」で聞いたことを実体験する

② アユの放流体験から

身近にいたはずのアユですが、実際に見たことのある子どもは少ししかいませんでした。社会科の町たんけんをきっかけに、アユについて知りたくなった子どもたちは、揖保川漁協が毎年放流を行っていることを突き止めて…

● ステップ1

- ・町たんけんでの疑問
- 「町に『鮎』っていう看板が多いのはなぜだろう?」

● ステップ2

[体験活動]

- ・放流体験
- ・漁協の方から聞いた鮎の話

● ステップ3

新たな疑問

『アユのいる揖保川は本当にきれいな?』
『揖保川はどこから流れているの?』

● ステップ4

[体験活動]

- ・水生生物調査。揖保川の源流を訪ねる



揖保川の源流調査へ
(水源が山にあることを知る)

たくさん出てきた疑問は、自分たちで解決できるものも多いです。これらの疑問を整理、分析するうちに、自分たちでは解決できないもの、調査しなければわからないものが出てきます。それがさらなる体験へと必然的につながっていくのです。

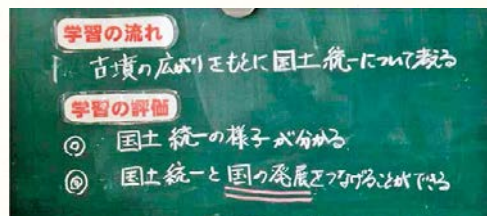
アクティブ・ラーニングのツボ

・学習課題の工夫(学ぶ必然性のある課題設定を)

子どもが興味をもち、「学びたい」となるためには、「知りたい」としてある必要がある。つまり、「疑問」である。

具体的には…

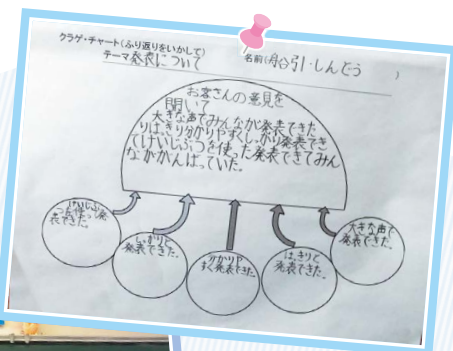
授業のはじめにみんなで話し合い、課題を設定する。あらかじめ教師が設定した課題や評価規準に結び付きそうな発言を取り上げたり、そういう言葉が出るような支援をしたりして、あくまでも「自分たちで課題を設定した」というイメージをもたせるとよい。総合的な学習の時間だけでなく、全教科で活用できる。繰り返しトレーニングすると自然に定着する。



6年生社会科の例
自分たちで話し合って本時の課題を設定。

豊かな学び合いのために ～効果的なツールの活用と環境設定～

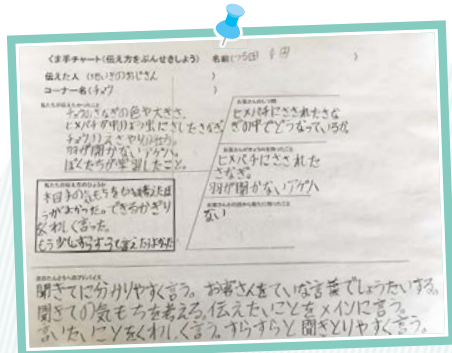
グループごとに 課題を分析



全員で共有

発信の場を工夫して、より学習効果をあげる

前述したように、「自ぜん研究所」では4回の発表を行いました。その際、全員の子どもが発表の機会を得られるようにするため、発表者を固定せず、一つのコーナーに複数の担当者を置きました。自分が得られた経験を、次の担当者にわかりやすく伝えるという体験もさせることができます。



自己評価だけでなく、
個から個への伝え合いとしても…

思考ツール解説 くま手チャート

発表を評価するシートとして活用しました。単なる振り返りではなく、観点をくま手部分に書くことで、明確に分析できます。最後に自己評価を書き込みます。次の担当者はそのシートを参考にして発表に臨むことができます。

「自ぜん研究所」では、それぞれ異なるゲストを招いて4回の発表を行いました。1回目の発表終了後、発表したことをもとに様々な課題が出されました。そこで、そのことを効率的に全員で共有し、次の発表へ向けて速やかに準備を進める必要が出てきました。

思考ツール解説 くらげチャート

パフォーマンス評価の具体的な手立てとして活用しました。足の部分に事実を記入し、頭の部分にはそれを受けて次の報告会に向けた改善点を記入させました。グループごとにくらげチャートで分析し、それをもとに再びクラス全体のくらげチャートを作成しました。分析の結果を踏まえることで、「相手の気持ちになって伝えることが大切だ」という考えをもつことができました。



アクティブ・ラーニングのツボ

・効果的なツールの活用

思考ツールやグループごとのホワイトボード、ICT機器などを、場に応じて活用することが非常に効果的である。

具体的には…

単に「考えよう」ではなく、「比べてみよう」、「分類してみよう」といった“思考スキル”を学習活動に取り入れることにより、子どもたちは具体的にイメージできるようになる。その活動を効果的に行う手立てが「思考ツール」である。ねらいに応じてツールを使い分けたり、同じツールでもねらいに応じて役割を付加したりすることを意識したい。



ダイズを味わう！

～東京都清瀬市立芝山小学校の
体験学習から～ 5年

尾形 弘 (元東京都清瀬市教育委員会 環境指導員)

1 はじめに

芝山小学校では、1979（昭和54）年度から近くの農地を借りて農園体験学習を取り入れている。畑を耕す⇒種をまき、苗を植える⇒生長を見守り大事に育てる⇒実った作物を収穫する⇒収穫を喜び、学年や全校児童で味わう。これら一連の活動を通して、「日常口にする作物の成り立ち」、「汗を流して働く意味」、「命ある食物を大切に理由」、「収穫の喜びや自然の恵みへの感謝」等を肌で感じてほしいと取り入れたものである。こうした一連の農園体験は3年前に農地の縮小で畑が校庭内に移った後もつづいている。

各学年の体験の中から、5年・西田隆一教諭の取り組みと学年児童の活動を紹介したい。

2 活動の流れ

「ダイズを使った食品がもっとあってもいいのではないかな？」

児童の疑問からダイズづくりが始まる。

畑を耕す

栽培地が不足しているため、校庭プール横にも畑をつくる。

コンクリート片や石を掘り出し、黒土を入れ、さながら開墾のような畑が完成(①)。

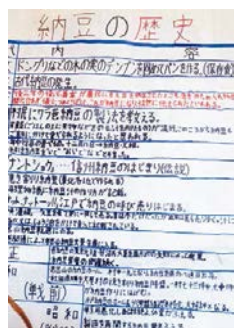
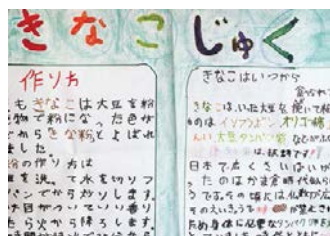
「大豆まつり」に思いを馳せて、栽培に心がこもる(②)。

有機栽培で茎や葉が青々と育つ(③)。



調べ学習

栽培をつづけながら、ダイズを使った食品の歴史と加工法について調べて発表し合う(ダイズの知識が深まり、栽培の関心や意欲が高まる)。



生長過程の緑のダイズを味わう

枝豆の収穫(畑に秋の収穫分は残す)。

さやの豆の部分がふっくらとふくらみ、つまんで弾力性を感じたら食べ頃。

枝ごとと根元から刈り取る。





その1 枝豆の調理

- ① さやの部分をもぎ取り、汚れを水洗いする。
- ② 鍋に水を入れ、砂糖、塩を加えて茹でる（15分くらい沸騰させる）。
- ③ 茹であがったらザルに入れて湯を流し、広い容器に移して冷ます。
- ④ 冷めたら完成。



枝豆パーティー
「採れたてはおいしいー！」



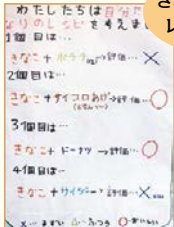
その2 ダイズの収穫とダイズを使った加工食品

収穫

- ① 実ったダイズを根元から刈り取り乾燥させる。
- ② 乾燥後ブルーシートなどを敷いてさやをもぎとる。
- ③ さやの上から棒（すりこぎなど）で軽くたたいて脱穀する。

きなこ班がまとめたきな粉づくりの手順

- ① ダイズを洗って水を切り、フライパンで炒る。
- ② 焦げ目がついてよい香りがしたら火から下ろす。
- ③ 粗熱を取り、ミキサーで粉砕する（すり鉢も使う）。
- ④ ふるいにかかけ、砂糖適量と塩を好みでかけたら完成。



きな粉を使った
レシピと評価

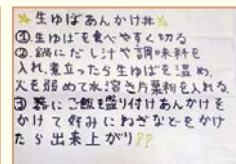
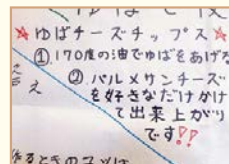
調べ学習で取り上げた、
きな粉と湯葉づくりに挑戦



ゆば班がまとめた湯葉づくりの手順

- ① ダイズを水に浸けて柔らかくしてすりつぶす（ミキサー、すり鉢を使う）。
- ② すりつぶしたダイズに水を加えて煮詰め、布でこす。
- ③ できた豆乳にきな粉を少し加えて煮立てる。
- ④ 上面にできた薄皮を竹箸で引き上げれば完成。

湯葉を使ったレシピ（保護者も応援）



大豆まつりを開いてみんなで味わう

③ 活動をおえて

芝山小学校の児童は、農作物や食への関心が高い。学校給食に地元産の野菜を取り入れていることもあるが、農園体験の影響が大きい。ダイズの栽培も児童の自然発生的な声で始まった。「自分たちで育てたダイズをみんなで味わってみたい」、学校農園における地産地消の体験である。

大豆まつりでの歓声はもちろんだが、児童は一連の体験を通して様々なことを学んだと西田隆一教諭は語る。給食で食事を粗末にする児童はいない。草花や生き物を大切にすること。そしてなによりも児童の主体性や積極性が増した。農園体験学習の効果は大きい。

座談会

教科・生活科の中の動植物について

本誌 69 号論壇執筆の高槻成紀先生、70 号論壇執筆の石井誠治先生をコメンテーターにお迎えし、弊社編集部がファシリテーターを務め、座談会を行いました。



コメンテーター 石井 誠治

樹木医。森林インストラクター東京会会長。環境カウンセラー。東京樹木医プロジェクト理事。武蔵大学卒業。子どもから大人まで、身近な自然に目を向けてもらう活動が好評。『樹木ハカセになろう』岩波ジュニア新書、『都会の木の花園鑑』八坂書房、『大人の樹木学』洋泉社、『木を知る・木に学ぶ』ヤマケイ新書などの著書がある。



コメンテーター 高槻 成紀

理学博士。東北大学大学院卒業。東京大学 農学生命科学研究科助教授、東京大学 総合研究博物館教授、麻布大学 獣医学部 動物応用学科教授を歴任。専門は野生動物保全生態学。ニホンジカの生態学研究に長く取り組んでいる。『野生動物と共存できるか』岩波ジュニア新書、『動物を守りたい君へ』岩波ジュニア新書、『唱歌「ふるさと」の生態学』ヤマケイ新書などの著書がある。

1 高槻先生にはご専門の保全生態学ということについて、石井先生は樹木医・森林インストラクターとしてご活躍ですが、それぞれどのようなものなのかお聞かせください。

高槻 生態学自体は、100 年ほどの歴史しかない、生物学の中でも新しい分野です。生態学そのものは、人間の環境問題に役立ったということはないのですが、視点としてはとても重要なものだと思います。20 世紀の終わりに、本当に自然が危ないという切実な危機感が生じて、今までの生態学を、動植物をよい形で保全し、人間から見た観点においてもよい形にもっていくというものが生まれました。これが保全生態学です。

動植物を理解することを学校の先生の立場にたとえて考えると、子どもを「理解する」ことは、名前を覚えれば十分ということではないはずです。そこがスタートで、子どもの個性や家庭状況、学力、体力などあらゆることを知る、そこで初めてよい教育ができると思います。それを保全生態学に置き換えると、動植物の種の名前がわかるのが出発点で、動植物がどういう暮らしをしているのか、林の中でどのような役割をしているのか

かという、森や林全体を考えたときに、それがどういう生き物なのかという発想をしていくことが大切です。

石井 樹木医と森林インストラクターという資格は、1991（平成 3）年にできました。その頃の社会情勢から、身近な自然環境に対する様々な危機感があつたようです。樹木医は、その名の通り、巨樹古木、天然記念物が傷んできたときにどう対処するのかという専門家の育成機関です。森林インス

トラクターについては、実は農業従事者の平均年齢よりも、林業従事者のほうが高く、林業自体がとても厳しい状況にあり、技術の伝承がなされなくなってきたの

です。それをどうにかしなければというところからできました。いわば、樹木医が都会派とするならば、森林インストラクターは里山派とでも言ったところでしょう

か。ですので、活動エリアが少し違うということです。いずれも、一本一本の木をその環境の中でベストな状態にしていきたいというのが目的・目標です。

2 生活科が生まれた背景には、子どもたちを取り巻く環境の変化により、自然と親しむことから生まれる原体験機会の減少ということがあり、そういう状況に対する危機感があったと思います。「唱歌ふるさと」のように、野にはウサギ、川にはフナ・メダカがいるというような環境は素晴らしいと思うのですが、かといって今の日本で再生するのは困難かと思いますが…。

高槻 よく、都会には自然がない、自然は夏休み等に、ときどき旅行に出かけてやっと触れられるものだと言いますが、わたし自身の体験からすれば、通勤コースでもその気になれば自然はあります。雑草群落があり、バッタやスズメなどがいます。要は、自然に対する目をもっているかどうかということです。都会に自然がないというのは、自然に対する見る目を失っていることを棚にあげているのだと思います。だから、自然環境を以前のように戻さないと見えないというよりは、身近にも自然はあるという目で見てみようということです。例えば、小学校のグラウ

ンドに、ちょっとした緑地があれば、結構いろんな雑草を見つかることができます。また、サクラやイチヨウ、クスノキなども学校にはあるのではないのでしょうか。その一本の木からも、枝の分かれ方や葉っぱのつき方など、学ぶことはたくさんあると思います。

石井 子どもたちに自然の原体験をさせるかということになると思いますが、今の小学生の保護者の世代でも原体験をしていないという状況です。そこが実は一番の問題でもあります。そうは言っても、足もとに注意を払えば、虫が見えるし、空を見上げれば樹木が見えます。コオロギやダンゴムシは、

格好の原体験に近い材料ではないでしょうか。

それらを大人が嫌がると子どもも親しまなくなってしまう。子どもたちは純粋で、虫＝嫌い、気持ち悪いとは刷り込まれていないのです。刷り込まれる前に、ミミズやダンゴムシに親しむことが大切です。その興味の芽を摘まないように育ててほしいものです。そこが生活科で一つ重要な役割を担っていることだと思います。

高槻 いずれにしても、先生が動物を好きになることが大事です。せめて子どもが生き物を嫌いにならないようにしてほしいですね。

3 生活科には定番の教材になっているものがあります。例えば、1年生の栽培ではアサガオ、2年生の栽培ではサツマイモというふうに。教科書で事例として取り上げると全国一律に扱おうとする傾向があります。それぞれに利点があり問題点もあると思いますが、どのように思われますか？

高槻 わたしは生態学者として、「全国一律」は非常によくないと思います。気候帯から考えても、北海道の亜寒帯（冷帯）と言われる植生から亜熱帯の沖縄のマングローブまである、南北3000キロにも及ぶ日本列島で、そもそも

同じ時期に同じことをするというのは、自然に対して失礼なことだと考えます。

例えばアサガオを育てるという場合、種子は条件によって発芽率が違うことを学ばせるのであれば、その条件を満たす材料をその

土地土地で先生方が探究して工夫してどの植物にするかを決めればよいのです。それでもうまく発芽しなかった場合は、なぜ発芽しなかったのかという課題が出て、学びへとつながっていきます。

4 外来種の問題は大変難しいと思います。動物でも植物でも同様の問題があると思いますが、それぞれの立場でお話を聞かせてください。

高槻 外来種の問題は保全生態学でも非常に重要なテーマの一つです。人間が本来ないことを身勝手に行ったときには、尻拭いをする責任があると思います。さもないと、植物を利用する昆虫、それを食べる鳥にまで影響が及んでしまいます。ただ問題は単純ではなく、例えば、セイタカアワダチソウは外来種ですが、すでに日本の景色



セイタカアワダチソウ

に溶け込んでしまっています。セイヨウタンポポもかしこりです。こういう外来種は排除するとは言えません。

石井 いずれにしても、自然帰化植物や、歴史的に記録がない時代からでも日本の在来種ではないものもあるので、それをどこまで遡るかということになってきます。そしてこのグローバル化の時代では、とにかく水際で防ぐということが先決です。

アメリカザリガニについて言えば、明治時代ぐらいに日本に持ち込まれて生息しています。アメリカザリガニを完全に排除してしまうと、今度は池に雑草が増え過ぎてしまい、池の生態系のバランスが崩れることも考えられます。大事なのは、日本における現在の生態系を壊していないかということです。例えば、アライグマはテレビアニメがあった影響もあり、飼

う人が増え、成長すると手に負えなくなり野へ放してしまう人がいたのです。アライグマは、タヌキと同じような食性であるため、餌を奪い、タヌキの個体数が減っていくという問題が発生し、生態系に及ぼす影響を考えたときにはそうとう深刻なものとなっています。

植物に関して言えば、動物に比べて急速に何か問題が起こるということはありませんが、じわじわと広がっていく感じです。例えば、綿毛を飛ばして広がり、気付いたら広範囲にまで定着して、いつのまにか日本の生態系の中に入り込んでしまっています。セイタカアワダチソウがその例です。

5 生活科、あるいは総合的な学習の時間の中で、動植物の学習の際に特に安全面での注意が必要だと思いますが、どのようなことに注意をすればよいのでしょうか？

高槻 わたしの感覚からすると、山や森では危険な目にあったことがなく、むしろ都会のほうが危ないことが多いと思います。強いて山で危険という観点から言うと、毒ヘビ（マムシ、ヤマカガシ）とかスズメバチぐらいです。

石井 植物で言えば、ツタウルシでしょうか。ツタウルシは、他のウルシと違い、地面に近いところから絡んでくるので、子どもたちの手に届くところに葉っぱがあり

ます。それにさわってしまうと、ひどくかぶれ、かいた手で他のところをさわると、そのかぶれが広がってしまいます。赤っぽくて毒々しいのですが、知らないからさわってしまうのです。こういったことは、最初に教えておくことが大切です。



ツタウルシ

6 小学校1,2年生は生活科ですが、3年生以上は「総合的な学習の時間」となり、各自自由な課題を設定し取り組むことが可能になります。将来の生き方にも大きな影響を及ぼす可能性があります。課題設定に関して、子どもたちや先生方にアドバイスをお願いします。

高槻 最近ニュースで、イルカの捕獲方法が問題視されたと報じられましたが、子どもに考えさせるにはよいテーマだと思います。ニュースでは、外国の団体から捕獲方法にスポットを当てられ、それを問題にしていたのですが、では水族館で飼うことはどうなのでしょう。イルカからしてみたら見世物とされることが残酷なこととも考えられます。野生動物についてもしかりです。例えばライオンは、獲物を見つけて追いかけて、チームプレーで捕まえるという進化を遂

げてきた動物です。それが動物園で毎朝、餌となる肉を配られて食べているのですから…。

また、動植物の死について考えさせるのもよいかもしれません。カブトムシが死んでしまったから墓をつくって埋めるということではなく、子どもの想像の翼を広げれば、毎年、ものすごい数の虫が生まれては死んでいるということに想いをはせることもできると思います。わたしの近所に立派なケヤキの木があったのですが、気がついたら切られてなくなってい

ました。そういうことも命を考える上で大切なことではないでしょうか。

石井 課題を設定するに当たり、動植物の関係から言えば、諸感覚を使った課題にすることが重要なのではないかと考えています。見ているだけではわからないことというのは多いですね。体験の伴う課題を設定することが大切ではないでしょうか。

7 最後に、生活科・総合的な学習の時間の授業を行う小学校の先生へのメッセージを !!

石井 身近な目標として、先生自身がミミズや虫を捕まえられるようになってほしいと思います。ザリガニやダンゴムシはもちろんのこと、ミミズやおおむし、やごなども自らさわって、子どもたちにもさわらせる経験をさせてあげられ

ればよいのではないのでしょうか。

高槻 生活科や総合的な学習の時間の授業では、動植物の本物の匂いを嗅いだり、さわったりという体験をさせることです。紙資料や映像だけではなく、できるだけ先

生方が努力をして子どもたちに本物の体験をさせることが大切なことだと思います。そしてそれは、教師の力量が試されるものでもあります。だからこそ、生活科は子どもに深く影響を与える教科・活動なのだと思います。



おしえて！ 藤井先生

藤井 千春

早稲田大学 教育・総合科学学術院教授。
博士（教育学）。1958年千葉県生まれ。
筑波大学大学院博士課程修了。
茨城大学助教授などを歴任。
ジョン・デューイの哲学と教育学を研究。
著書 『問題解決学習のストラテジー』
『子ども学入門』『問題解決学習の授業
原理』（いずれも明治図書）など多数。



Q

体験活動をしているとき、子どもたちはとても楽しそうにしています。しかし、まとめや振り返りではそれぞれが感じたことをうまく表現できません。体験したことを表現するために有効な言語活動があれば教えてください。

A

各教科や道徳などの授業で、子どもたちは、本当に自分が気付いたり感じたりしたことを語っているのでしょうか。子どもたちに教師が言わせたい「正答当て」をさせてはいないでしょうか。

まとめや振り返りで活発に気が出されて新たな知識や技能が共有されたり、次の活動に向けてのめあてや意欲が高まったりしている学級では、各教科や道徳などでも、教師の指導に次のような特徴が見られます。

第一に、子どもに自分が感じたことを具体的な言葉で語らせています。何についてどのように感じたのかをじっくりと語らせ、その子の個性的な感じ方をみんなで理解し合うことを大切にしています。

第二に、自分が日常生活で見聞きしたことや体験したことなどをつなげて疑問を出したり、理解したりすることを大切にしています。

第三に、子どもの発した言葉を、教師が自分に都合のよい言葉に言い換えません。子どもの口から出た言葉を大切にし、その意味について子どもたちに考えさせています。

このような学級では、子どもたちの問題発見力や追究力などが高い水準で育っています。

子どもたちの言語能力の育成は、特別な方法での訓練ではなく、各教科や道徳などの授業での言語活動のあり方を改善することによって遂げられるのです。言語能力とは、抽象的な内容を抽象的な言葉で言えることではありません。**自分の心や身体で感じたことを、自分の言葉で語ることからその成長は始まります。それをみんなと語り合い、聞き合い、考え合うことを通じて、思考・判断・表現のための言語能力として育つのです。**

学校生活全体で、自分の心や身体で感じたことを、自信をもって語れるようにしなければなりません。教師は子どもの心の動きに寄り添い、共感的に受け止めて、共感の輪が子どもたちの間に広がるように伝えなければなりません。**教師は子どもの返答の正誤を判定する「審判」ではありません。「教師が言わせたいこと」から解放しなければなりません。**

子どもが自分の心や身体で感じたことに自信をもてるようにすることが、学ぶことへの意欲と自信が育つことにつながるのです。

研究と実践①



総合

体験活動と表現活動の サイクルで、資質や能力を育む

～3年「調べよう！見つけよう！大野たんけん隊」の実践から～

佐藤 千紘（福島県相馬市立大野小学校 教諭）

1. はじめに

本校では、育みたい資質や能力として「つかむ力」、「探る力」、「決める力」、「ともに学ぶ力」の四つを設定し、各学年の実態に応じ、総合的な学習の時間のテーマを決めて取り組んでいる。そこで、3年では、伝える活動を通して相手意識をもたせたり、友だちや地域の人たちと協同的に課題の解決に取り組ませたりすることで、前述の資質や能力を育めないかと考えた。

テーマの設定にあたっては、主に社会科の学習と関連付けながら、地域と結びつけた学びを展開できるよう配慮しながら進めた。それは、学校周辺を探検する中で発見した「人・もの・こと」から自分たちが住む地域の魅力に気付き、そこから探究していきたいことについて話し合い、設定していくというものである。そこで大野地区の特産物である「梨」に対しての児童の関心の高さや、それをもっと知ろうとする意欲が高いことから、梨を中心教材にすえ、体験活動を積極的に取り入れながら地域の魅力に迫っていきたいと考えた。また、梨畑は学区内にあり、児童にとって身近で繰り返ししかかわっていくことができ、相馬市の農産物の中で生産量が1位でもあり、より地域に愛着をもちやすく、児童自らが地域のためにできることを考えて実践していきやすいということからも教材に適していると考えた。

本単元では、児童が住んでいる地域の人たちとかかわっていく中で、大野地区の魅力を調べ、その魅力に迫っていく活動を展開していった。児童たちは、体験

活動を重ねる過程で、感じたことや考えたことを振り返ったり、それぞれの考えや思いを共有したりしながら、その都度学んだことを表現していった。体験活動と表現活動に取り組んでいくことで、新たな課題をもちながら、次のサイクルへと動き出すこととなった。

2. 実践内容

本単元の流れは、次の通りである。

＜第1次＞「大野っこタイム」で何をするか考えよう

＜第2次＞大野の梨を探ろう

＜第3次＞大野の梨の魅力をアピールしよう

＜第4次＞大野の魅力を発信しよう

と大きく四つの小単元に分け、学習を展開した。

（1）出会いからの課題設定

本校では、学年の始めに、総合的な学習の時間に関するオリエンテーションを行っている。前年度の6年生の実践を例にあげ、探究の過程（「課題設定」→「情報収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」）を繰り返しながら、自分たちの疑問や課題を解決していく学習であることを確認した。

そこでグループごとに、「大野」というキーワードを中心に置き、そこからイメージすることをウェビングマップに表した。その内容には、自分たちが住む地域について、これまでの生活経験を振り返ったり、生活科の町探検や社会科での体験活動を踏まえたりした内容が多く見られた。

もらうためのPR活動を積極的、主体的に行っていくこととなった。

PR活動として、「梨の1年間」、「梨の種類」、「渡部果樹園のこと」、「梨づくりにかかわる人たちの思い」、「アンケート結果」の五つのグループに分かれ、これまで調べてきたことをもとに、学習発表会で伝えることにした。新聞やクイズ、劇やポスターなど、各グループで表現方法を話し合い、工夫してまとめることができた。また、発表を互いに見せ合ったことや発表を見た保護者の感想などから、伝えることに自信をもつとともに、地域の一員としての自覚が高まったように思う。

その後、これまでの学習を振り返り、「総合的な学習の時間を通じて、どのような力が身についたと思うか」と問いかけると、主に「調べる力」、「伝える力（発表する力）」、「友だちと協力する力」などをあげる児童が多かった。これらの力を使って、今後、自分たちはどのようなことができるかを考えさせると、地域の一員としての自覚が生まれていた児童は、最初のウェビングに立ち返って、大野の魅力を見つめ直し、梨だけでなく、多くの魅力があることに気づき始めたのであった。そこで「大野を元気づけ隊」を結成し、地域の魅力を再発見し、アピールしていくことになった（さらなる表現活動への始まり）。

- ・大野地区の「梨」
- ・大野小のよさである「あいさつ」
- ・相馬の伝統行事である「相馬野馬追」
- ・相馬の伝統を伝えつづける施設「郷土蔵」

他教科の学習も関連付けながら、伝えていきたい地域の魅力を話し合い、上記四つのグループに分かれて活動した。

総合的な学習の時間に限らず、様々な学習活動の過程で経験してきたことや、これまでの表現活動の経験



を生かし、パンフレットやペープサート等を使って表現していた。全校児童に呼びかけ、ワークショップ形式での発表会の機会をつくり、他学年の児童から、多くの励ましや称賛する内容の感想をもらった。そのことにより、児童の充実感や達成感の高まりにつながったといえる。

3. 成果

探究の過程を繰り返す学習を展開すること、その過程で体験活動を位置付け、活動後にはまず各自で振り返ること、そして全体で共有することを大切にしてきた。そこから、児童の「知らせたい」、「伝えたい」という思いが生まれ、表現活動へとつなげていくことができた。また、伝える対象を明確にすることで、相手意識をもち、様々な表現方法の工夫につながったと考える。1年間の振り返りカード（自己評価カード）から、「みんなで協力して、調べたことをまとめることができた。」、「調べるのは大変だったけど、大野についていろいろなことがわかったし、多くの人に伝えることができた。」等の感想が見られた。このように、体験活動と表現活動のサイクルを位置付けていくことにより、すすんで他者と協働しながら調べていく力や、相手を意識して伝える力を身につけていくことができた。

4. おわりに

3年生にとっては、生活科を学習してきた上での総合的な学習の時間であることも踏まえ、児童にとって身近な地域から追究していく課題を設定し、学習を進めてきた。生活科での体験活動を踏まえた児童の思考の広がりが見られ、気づきの質も高まっていった。そのことが、児童の「自分の学びや考えを伝えたい、広めたい」という思いとなり、多様な表現活動へとつながっていった。体験活動と表現活動を繰り返して、つないでいく過程で、児童が対象との出会い方やかわり方を工夫し、他者と協働しながら活動する力を高め、より地域への愛着をもてるよう、今後も教師としてできることを考えていきたい。

研究と実践②



総合

地域で働く人々から学ぶ

～3年 菜の花プロジェクトを通して～

田矢 聡子（三重県伊賀市立大山田小学校 教諭）

1. はじめに

本校では、めざす子ども像として「自分が好き！友達が好き！大山田が好き！」をキャッチフレーズに教育活動を進めている。具体的には、一人ひとりの子どもの姿やその背景を見つめた上で、地域のよさを発見し、そこで生活している人々との出会いを通して学んでいくことである。そして、そこから自分の生き方を見つめ、将来のありたい自分をさがしていく。そんな教育活動を行っている。

また、子どもの実態や意識から出発した人権総合学習を系統的に行い、子どもが自ら進んでいきいきと学べる総合的な学習の時間を展開している。

3年生では、自分たちが住む大山田をよく知り、地域を住みやすくするために活動している人との出会いから学習が展開される。

この授業を始めるきっかけは、伊賀市で2010（平成22）年から「伊賀市菜の花プロジェクト」に取り組んでいたことにある。この取り組みは、遊林農地を活用して、美しい農村風景をつくり、地域の活性化に結び付けようというもので、「自ら行動をおこす」というその姿勢から、自分たちにも大山田を活性化するために何かできることはないかと思いを巡らせた結果である。

2. 目標と流れ

目標

- 菜の花プロジェクトの聞き取りを通して、多くの人々の願いや工夫・努力に気付く。
- 菜の花や菜の花プロジェクトについて、もっと知りたいことや興味のあることを自ら考え、調べたり考えたり感想をもったりすることができる。
- 菜の花プロジェクトや大山田のよさを広める取り組みを継続し、たくさんの人に知ってもらうためには、自分たちにできることが何かを考え実行することができる。
- チームの活動を通して、仲間の大切さや仲間と協力することの大切さを知ることができる。

指導計画（全43時間）

- 第1次 菜の花畑を見学し、菜の花の変化を知ろう（16時間）
 - ・学校周辺の菜の花畑見学…………… 3時間（3回）





- ・菜の花（畑）について聞きたいことを出し合う
..... 1 時間
- ・菜の花（畑）についての聞き取り..... 2 時間
- ・聞き取ったことを振り返る..... 1 時間
- ・もっと知りたいことややってみたいことを出し合う
..... 1 時間
- ・菜の花の秘密を探る（調べ学習）..... 4 時間
- ・調べたことをまとめる..... 2 時間
- ・まとめたことを発表する..... 2 時間

第2次 菜の花の刈り取りと「菜の舎^{くら}」を見学する (10時間)

- ・菜の花の刈り取り見学..... 2 時間
- ・菜の花クイズを考える..... 1 時間
- ・クイズの答えをみんなで考える..... 2 時間
- ・「菜の舎」見学 3 時間



- ・菜種油「七の花」を使った料理をつくって食べる
..... 2 時間

第3次 自分たちにできることを考え実行しよう (17時間)

- ・どうしたら菜種油をたくさんの人に知ってもらおうこ



- とができるか考える..... 2 時間
- ・「菜の花プロジェクトせんでんはまかせろチーム」,
「おいしいレシピを考えるチーム」,「ゆるキャラせい
さくチーム」,「デザインチーム」,「菜の花さいばい小
学校チーム」,「油かす研究チーム」の六つのチーム
に分かれ、自分たちにできることを実行していく
..... 8 時間



せんでんはまかせろ
チーム



おいしいレシピを考える
チーム



ゆるキャラせいさく
チームが考えたゆるキャラ



デザインチーム



菜の花さいばい小学校チーム



油かす研究チーム

- ・チームの活動を交流する……………3時間
- ・自分たちの活動を全校やうちのの人に発信する
……………3時間
- ・学習やチームの活動を通して、わかったことや考えたことを綴る……………1時間

3. 成果と課題

一年間を通した単元構成で授業を進めるという長い取り組みであった。昨年は、小学校周辺で菜の花を育てていたため、何度も菜の花畑に足を運び、変化を見ることができた。

その上で子どもたちは、菜の花プロジェクトや菜の花のことをさらに知るにつれて、次々と疑問や知りたいことが出てきた。その都度、自分たちで調べたり、電話で聞いたり、直接出かけて話を聞いたりした。地域の方の協力なしにはこの学習は成り立たなかったことであり、子どもたちはその協力を得ながら、自分たちでどんどん進めていくことができたのである。

話を聞く中で、菜種油がなかなか売れないことを知り、どうしたら菜種油が売れるのか、学習してきた自分たちにできることはないのかを考える支援を行った。そして、六つのチームに分かれ、自分たちにできることを考え活動していったのである。班や規則的に分けたチームではなく、そのことをやりたいと自分で決めたチームでの活動である。人数が多く、なかなか意見がまとまらず苦労したり、けんかをしたりというあったが、どのチームも最後までやり遂げることができた。活動する中で、普段は気付かない友だちのよさを発見することもできた。

そして、「デザインチーム」がデザインしたラベルのついた菜種油を何回か販売することができた。「菜の花プロジェクトせんでんはまかせろチーム」がつくった名刺を胸につけ、「おいしいレシピを考えるチーム」が考えたレシピ集を買ってくれた人にわたす。菜種油を置いている机には、「ゆるキャラせいさくチーム」が考えたゆるキャラの旗が飾られている…と、最後にはチームで協力して販売することができた。

みんなで協力して進めることの苦労や喜びを肌で感じることはできたのではないだろうか。



自分たちがデザインしたラベルのついた菜種油販売

子どもたちの最後の感想では、「この学習をこれからずっとつづけたい。」「菜の花グッズの店を出したい。」「他のところでも菜種油を売りたい。」などが出された。

この活動を、これで終わりにするのではなく、形は違ってもいろいろなやり方で進めていくことが大事だと考える。地域のことを知り、地域で活動している人と出会い、地域をよくするために自分たちにできることを考える活動は、これからも大山田小学校にしかできない取り組みとして、継承していかなければならないと感じている。

4. おわりに

昨年度に引きつづき、もち上がりで子どもたちを担任することになった。

商品企画の応募をすることにし、チームで話し合う機会を設けた。機械的に分けたチームだったが、そのなかで誰かがリーダーとなり話し合いを進める姿があった。これは、昨年度の一年間の取り組みの成果の一つなのだと感じた。

これからも、地域に学び、地域の人たちとのつながりを大切にしながら、総合的な学習の時間を進めていきたい。まずは、わたし自身が地域のことを知り、総合的な学習の時間は楽しいと自分自身が感じる事が大事だと考えている。

ナカヤマヒロシの てでてだ 18

〇〇クラスによろこ …… 教室案内（学級通信）



用意する物

・学級通信

ポイント

参観日の学級通信には、次のことを載せる。

- ①実施した単元の目標や生活科で育てていきたいことを説明する。
- ②実践の経過や子どもと教師のかかわり方などについて添える。
- ③それぞれの作品の始まりと経過や特色について概説する。
- ④詳しいことは、子どもの説明にゆだねる。

手順

- ①何回かの学級通信を利用して、教室には生活科で作成した作品が増え、徐々に生活科の空間となってきたことを事前に保護者へ知らせて期待感をそそる。
- ②授業参観直前の学級通信で、参観のお知らせを記載する。
お知らせには、次のことを添える。
 - ・今まで作成した子どもの作品が展示されていること。
 - ・それぞれの作品については、子どもが説明すること。
 - ・作品についての質問を受けるので、子どもにたくさん質問をしてほしいこと。
- ③授業参観日の学級通信には、教室案内を特集して、受付に置く（上図参照）。
- ④保護者は、教室案内の学級通信を読みながら、教室内の作品を見学する。



中山洋司
(なかやま ひろし)

平和学園 学園長。
40年以上のキャリア
の中で、幼、小、中、高、
大学及び国・公・私
立学校すべての校種
を経験。編著に「日
本の未来はこれで変
わる!」（日本文芸出
版）など。2007年
より現職。



幼・保・小

～幼稚園・保育所から学ぶ連携のヒント～

当園のある地域は、1965（昭和40）年頃までは農家が点在するのどかな田園地帯でした。それが日本住宅整備公団による団地が造成され、つづいて国鉄武蔵野線が開通したことで地域開発が急速に進み、地域での幼稚園の必要性が高まる中、1978（昭和53）年4月に開園しました。『心身ともに健康で心豊かな子』の育成を園訓とし、仲良く遊び、話をよく聞き、終わりまで頑張る子どもを育てています。



豊田幹雄 園長先生



教育方針

- ①善悪をわきまえ、自らする強い意志を育てる
- ②友だちと仲良く遊び、心情豊かな子の育成をめざす
- ③強い体と、美しいものに感動する子の育成をめざす
- ④明るく素直な子どもの育成をめざす
- ⑤動物を愛護し、自然に親しむ子どもの育成をめざす
- ⑥創造性豊かな子どもの育成をめざす

特色

バランスのとれた年間カリキュラム

餅つきや盆踊り会などの日本古来の伝統的な行事や、発表会などの大きなものを含めて、年間30回ほどの行事があります。これら行事を通して子どもから「頑張り」を引き出すように心がけています。それは、一生懸命に取り組むことは確実に子どもたちの成長の糧となっていくものと考えているからです。また、子どもなりの理解力を高めること、何事にも失敗を恐れずにチャレンジする心を育てることによって、生きる力を育めると確信しています。

また自然を通して行う教育も盛んで、毎年、アサガオの栽培や野菜づくりを体験します。今年はジャガイモが実らなくて失敗したのですが、子どもたちには「自然とのかかわりで野菜はできないときもあって、スーパーに行って野菜の値段が高いときは、野菜があまり採れないってことなんだよ」という話をしました。こうした実体験から豊かな感性を育てていきたいと思っています。



毎年、年長児全員参加で行う鼓笛隊。年中の終わってから始めて、秋の本番まで練習を重ねていく。刺すような日差しの中でも一生懸命集中して取り組んでいる

園の行事・夕涼み会で踊る「三郷音頭」を練習する年中児。帰る直前のほんの短い時間にも活動が充てられている



紙芝居を読んでもらう年少児。1日1回はお話を読んであげられる時間を採り入れている



秋のサツマイモ掘りの様子。子どもたちは生長の様子を記録して楽しみにしている



スロープ



第11回

いなほ幼稚園
（埼玉県三郷市）

連携のポイント こうすればうまくいく！

いすに座って集中できる子どもに

現在、三郷市での幼小連携活動と言えるものは、就学時に新一年生の動向を小学校へ伝える「幼小連絡会」です。小学校側も幼稚園側も互いに連携活動の必要性を感じながら、どう取り組んでよいかを模索している状況です。

三郷市内の小学校では、数年前から保護者や近隣の人たちが自由に参観できる学校公開日を設けています。今年は当園の教員も邪魔して、授業の様子を見学させてもらいました。そこで、幼稚園時代に落ち着きのなかった子どもが、小学校でも落ち着きのない様子を目の当たりにしたのです。「これは幼稚園のほうで、子どもたちが45分間の授業を落ち着いていられるようにしないといけない」と痛感しました。その経験から、当園では年長児については、制作活動の時間に30分程度集中して取り組める活動を意識的に採り入れるなどして、1年間をかけていすに座って長時間集中できるようにしています。

小学校の校長先生からは、「教室から出歩いてしまう子どもが多くて先生方が授業を進めるのが大変な年もあるんですよ」という話も聞きます。小学校の授業が成立しないようにしてしまうのは幼児教育側の責任といってもおかしくないくらいに思っています。幼児教育側は、真剣にそのことを受け止めていかないとはいけません。

始まったばかりの連携活動

小学校と幼稚園の子どもたちが行き来をして交流できるようにすることを望んではいませんが、実際には課題もあります。例えば当園の子どもたちは、だいたい四つの小学校の地区から通っています。本来は全員が入学予定の小学校と交流ができればよいのですが、そうなると時間的に難しいのです。

ただこの3月に、その中の一校の校長先生から、是非見学に来てくださいと言われ、年長児全員を連れて学校見学をさせてもらいました。校舎を案内してもらったり広い校庭で遊ばせてもらったりして、子どもたちは大喜びしていました。これから始まる小学校での新生活の参考になったのではないのでしょうか。

一方で、ほかの小学校の先生からは、幼稚園での子どもたちの様子を見学したいという相談もきています。そうやって少しずつ幼小がつながっていけばよいと思っています。

小学校に期待すること

1年生だからといって、ちやほやと甘やかさないでほしいと思います。確かに6年生と比べるととても小さいので、手助けしたくなる気持ちはわからなくはないのですが…。幼稚園でも、身の回りのことができるようにしています。小学校でも日常生活に慣れたら、すぐ適応できると思います。

和田先生の

ひとこと

コメント



和田 信行

東京成徳大学 子ども学部特任教授。
東京都生まれ。
都内の小学校教諭を経て、足立区、八王子市の各教育委員会の指導主事、都立教育研究所統括指導主事。
その後、新宿区立四谷第三小学校校長兼四谷第三幼稚園園長。
元全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会会長を歴任。
専門は幼児教育と小学校教育をつなぐ理論と方法の研究。

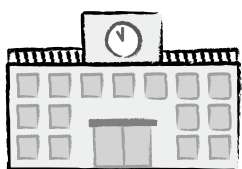
1 幼児期に必要な心情・意欲・態度

幼児教育は、心情・意欲・態度を育てる場であると言えます。いなほ幼稚園の教育目標は、幼児期に育てるべき大事な心の教育を掲げています。そして、その心を育てる教育を日々実践していることはすばらしいことですね。

2 双方からアプローチをすることが大切

小学校入学直後の児童の落ち着かない状況について、幼稚園や保育所が一方的に責任を取るのでしょうか。アプローチカリキュラムとして就学前の計画が必要であるとともに、小学校入学一か月程度のスタートカリキュラムも必要です。接続期のカリキュラムを保・幼・小で連携して作成・実施したいものです。





● 特色ある実践を求めて

生活・総合を楽しむ味

1988（昭和63）年から89（平成元）年にかけての「ふるさと創生事業」。各市区町村に対して、地域振興のために1億円が交付された。各地でユニークな取り組みが行われた。身近なところでは、淡路島の津名町（当時）の1億円金塊が話題となった。果たしてこの事業は成功したのだろうか？

2014（平成26）年、国は「まち・ひと・しごと創生事業」を立ち上げ、予算として1兆円を計上し、「時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する」や「地方にしごとをつくり、安心して働けるようにする」等の取り組みを奨励している。また、「教育振興基本計画」（2013（平成25）年6月）においても、基本施策30として「活力あるコミュニティが人々の学習を支え、生き抜く力をともに培い、人々の学習がコミュニティを形成・活性化させるという好循環の確立に向けて、地域の教育資源を結びつけ、学校や公民館等を拠点とした多様な人々のネットワーク・協働体制を確立する必要がある。」「全ての学校区において、学校と地域が連携・協働する体制が構築されることを目指し、社会全体で学校や子どもたちの活動を支援する取組や地域とともにある学校づくりを推進する。…」等がうたわれている。

先行き不透明な時代を生き抜く子どもたち、少子高齢化の波は子どもたちに更なる困難を強いることとなる。地方はますます先細る危険性が高い。地域に活気があってこそ、国全体が活性化する。「ふるさと創生」は人づくりから。未来の地域の担い手を育む上で総合的な学習の果たすべき役割は大きい。

全学年で屋島の自慢を発見・発信！

香川県高松市立屋島小学校（岡静子校長）は平成27年度全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会（10月

30日）の会場校の一つである。2年生活科「やしまの町ってどんな町？」の河野恵子先生の探検帽と探検服に驚かされた。この日の授業は、探検の振り返り。グループごとに探検先の店のどんなことをクイズにするのかを理由を付けて話し合った。決定したグループは帽子をかぶるというルールが徹底し、河野先生はその様子を見て適切に机間指導に入る。八百屋グループの決定理由が面白かった。「○○さんの（腕より太いソーセージ）は、まだばれてないからそれにしよう」である。五つのグループが順番にクイズを出していった。

4年総合的な学習の時間では、豊富な地域素材を生かし、「見よう！ふれよう！感じよう！大好きな景色・自然・伝説」に取り組んでいる。学級ごとに景色、動植物、伝説や名物の自慢さがしを展開している。参観した授業（山地八重教諭）では、太三郎狸の自慢について理由を付けて発表していた。子どもたちによると、この狸は道に迷っていた空海を老人に化けて案内した、屋島寺を崩壊から守った、狸の総大将になり狸どうしの喧嘩の仲裁を果たした、全国から集まった若い狸に教育を行った、等々の偉業が次々と紹介された。5年は「おもてなしガイド、観光ツアーづくり」に取り組み、春の遠足で「屋島はやほやガイド隊」を行っている。4年のこの学習が生かされるのだろうか。3年は「まつり」、6年は「演劇（^{やしおき}屋嶋城・源平合戦）づくり」と、全学年で地域のよさを再発見し、様々な方法で発信している。全体的に話し合う力、話す力、聴く力が定着している。



わいの旅

その18



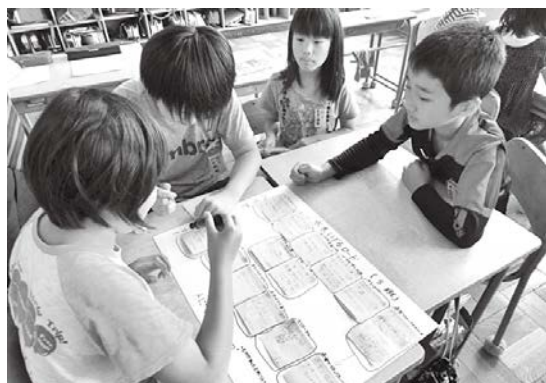
村 川 雅 弘

MASAHIRO MURAKAWA

鳴門教育大学大学院 教授。
専門は教育学、カリキュラム開発、生活科・総合的な学習。日本教育工学会理事、中教審専門部会委員などを歴任。

地域活性化に向け子ども主体で問題解決に臨む

鳥取県境港市立境小学校(松田寛彦校長)も前号で紹介したように、全学年で地域素材を生かした生活科・総合的な学習の時間を展開している。2年生活科「どきどきわくわく まちたんけん」(川田亜栄加教諭)の探検の計画づくりを参観した。探検先によって、2名から7名までの5グループがあるが、いずれもその日の司会を中心に子どもたちの話し合いが成立している。わたしが常々提案している「子どもがつなげる言語活動」が定着している。



4年総合的な学習の時間「ゆめっ子環境プロジェクト～人にやさしい町づくりパート2～」(成瀬欽子教諭)の授業では、水木しげるロードは人にやさしい道について考えていた。各自の考えをふせんに書き、バリア(ピンク)とバリアフリー(ブルー)に分けてグループで整理している。点字や点字ブロック、スロープなど障がいのある人への配慮がなされている一方で、入り口が狭い、物が置いてある、道がガタガタして穴がある、点字ブロックが途中で切れているなど、対応の不十分さにも気付いている。学級やグループによってバリアとバリアフリーの割合は異なっており、そのバランスによってやさしい町かどうかの判断は決まってくるようだ。境小では教師用の「虎の巻」を作成中で

ある。教材研究や授業づくり、育成する力の明確化、話し合いや思考を促す手立てなどを整理している。その成果がすでに授業の中で現れている。11月20日の公開研究会が楽しみである。

島をあげての人材育成や起業に期待して

広島県大崎上島町立東野小学校(平田修校長)は瀬戸内海に浮かぶ人口約8000人の島にある。その前後の日程が組めず、朝8時20分から10時過ぎまでの校内研修会となった。学校全体が博物館のようである。出土された石器や土器、昔の道具がオープンスペースに陳列されている。島には前日入りしたが、風光明媚な風景に魅入られた。しかし、離島共通の課題であるが、この島も人口減の問題を抱えている。

参観した授業は、6年総合的な学習の時間「つなげよう! 東野の伝統文化Ⅰ」(徳山順子教諭・須賀知子教諭)の「大崎上島の昔の人々の暮らしの知恵を知るために、課題をバージョンアップさせよう」である。島には古墳が10か所ある。「土器の使い方」、「古墳が多く見られた時代や理由」、「塩づくり」の三つのテーマに分かれ、各グループで調査してきた結果を、「Yチャート」を使って整理・分析する。視点は「どうして調べたいのか?」、「どんな知恵が学べそうか」、「どうやって情報を集めるか」の三つである。成果のグループ間交流を踏まえて、さらなる調査が展開されていく。

平田校長より3年間の研究指導を依頼された。「島をあげて総合的な学習の時間を核にして、ふるさとを担う人材、島に新たな仕事をつくり出す人材を育成するならば、10年通います」と回答した。「ふるさと創生」のモデルとなることを願っている。

生活・ 総合への 提言

～学校と社会教育とが
連携を図った総合的な学習の
時間の取り組みの重要性～



大久保 善邦
北海道東川町立東川小学校
校長

1 はじめに

『子どもは地域の宝である』との認識に立って、「日本一の“子育て・教育の町づくり”」を目標にして果敢に挑戦しているのが、わが町である。

本校では、この目標を受け教育活動の工夫・改善に取り組んでいるところであるが、地域環境を教材として体験活動を重視する生活科や総合的な学習の時間にとって、町教育行政と連携しながら地域の教育資源の活用を図った教育活動の展開が特に重要であると考え

る。そこで、社会教育との連携を図った本校の総合的な学習の時間（大雪タイム）の実践を紹介する。

2 次世代につながる教育環境の充実をめざして

写真文化首都「写真の町」ひがしかわは、北海道の屋根である大雪山連峰旭岳の裾野に広がる人口約8000人の町である。本校は、次世代につながる教育環境を整備しようと、16.3haの広大な敷地〔愛称「東川ゆめ公園」2015（平成27）年命名〕の真ん中につくられた。

2014（平成26）年10月より使用を開始した新校舎は、地域交流センターを併設し、平屋で直線通路約270m、本校の廊下分だけでも直線約212mもある。本校玄関前には、安田侃^{やすだ かん}氏の作品「帰門」が子どもたちの登下校を見守っている。校舎内は、本町の産業である木材がふんだんに使われており、そして至るところに地元芸術家のモニュメントが飾られている。



校舎周りには、野球場、人工芝のサッカー場、天然芝の多目的グラウンド、体験農園



（水田・畑）、果樹園、プレーパークなどがあり、幼児センターが隣接している。

3 大雪タイムの取り組み

① 田んぼの学校（5年）

2012（平成24）年に学校教育と社会教育が相乗効果を発揮し、相互の教育効果を高め、子どもから高齢者までが学ぶことのできる生涯学習の基盤整備を図ることを目的に「東川町学社連携推進協議会」（以下「協議会」と記す）を設置した。構成メンバーは、町各学校長、町教育委員会、町役場各課長、観光協会、地元民間団体、大学教授（アドバイザー）などである。

本校では、以前から地域の人々の暮らしをテーマに稲作栽培を行っていたが、協議会ではそれをさらに進めて「食育事業の推進」に合わせ、圃場の整備管理の支援を行っていったようになった。

6月 田植え

7月 草取り

観察

10月 収穫

12月 調理・会食



② 新校舎への願いを知ろう（3～6年）

新校舎移転に伴い協議会では、本校への支援をどのようにしたらよいか議論となった。そこで、子どもたちには自分の学習用具を、地域の人々には学校図書を持ってもらい、一緒に新校舎まで（約800mの行程）運んでもらうことにした。また、新校舎建設に携わった方々の思いや願いを聞くことを通して、新校舎を大切に作る心を高めることにした。そこで、協議会は各説明者への依頼を行い、地域ボランティアは会場設営など当日の準備を行った。

本時は、全体監修者、建設事業者、アート作品制作者、児童の机やいすの制作者などが体育館の各ブースに分かれ、ワークショップ形式で説明を行った。学校は、全体進行と児童の指導を行った。子どもたちは新校舎の新たな発見や大切に使うなどの思いをふくらませていった。



③ 「『写真の町』 ひがしかわ」を発信しよう（4年）

1985（昭和60）年に「写真の町」を宣言し、写真写りのよい町をつくろうと、写真コンテストや高校生を対象にした「写真甲子園」を開催している。役場内に「写真の町課」を設置し、各種事業の開催や各学校の取り組みへの支援を行っている。2014（平成26）年には「写真文化首都」宣言をした。

本校では、1988（昭和63）年からクラブ活動の一環としてインスタントカメラを配布し取り組んできたが、総合的な学習の時間の開設に合わせて「地域への関心を深める」単元として、4年生を対象に実施している。指導者は、地元在住の写真家や写真の町課職員である。

- 1 写真の町になったわけを調べよう
（文化ギャラリー等の見学・調査時の説明）
- 2 写真を撮ってみよう
（デジタルカメラの使い方、撮影時のアドバイス）
- 3 写真ワークショップを開こう
（写真の講評など）
- 4 活動を振り返って



4 おわりに

前述した「新校舎への願いを知ろう」の単元は、年度当初の計画にはなかった活動であったが、単元目標や本時のポイントなどを検討し、年間指導計画を見直して時間を確保した。協議会の思いと単元の目標とを共有化させるために会議を重ね、今回の実践となった。

学校と地域・保護者がともに知恵を出し合い、互いの得意な分野を生かした指導は、地域社会とのかかわりを重視した総合的な学習の時間において、活動の柔軟性や発展性へとつながっていく。学校と町（行政）・地域が、十分に話し合い、一体となって“協働し合う”ことが、特に重要であると考えられる。

ほうとう



山梨学院短期大学 食物栄養科 教授 依田萬代



“ほうとうは山梨県の郷土食”

「ほうとう」と言ったら山梨の冬の定番、野菜たっぷりの煮込みうどんである。さて、どうしてつくられるようになったのだろうか。それには、いろいろな説がある。麺材料の小麦は、地形的に水田が容易でない場所の斜面の畑で栽培し、芋や豆類、野菜類とともに耕作していた。ほうとうについて史料をひも解くと、『斎民要術』(中国最古6世紀の農業書)や平安時代後期の辞書『伊呂波字類抄』にも「餲飩クワ」という文字が出てくる。江戸時代後半、修験者の泉光院は『日本九峰修行日記』を残し、甲州旅行の食記事での内容は、蕎麦切り、ほうとう、団子など「粉食が多い」と記載されている。これら史料の共通点は①小麦粉製品、②練った生地を薄くのばす、ということだ。加えて、江戸時代は水車と製粉具の発達やその普及により粉食文化を一層発展させたことも要因の一つだろう。

「うまいもんだよ南瓜のほうとう」と一般的に言われ、具材にはカボチャを始めサトイモ、ニンジン、ダイコン、油揚げ、ナガネギなど季節の野菜やきのこ類が入る。味噌で風味高く、煮干しのだし汁に地粉は、「ごんばち」と呼ばれるこね鉢でこねあげて生麺をつくる。まさに甲斐の土地柄が示されている。ほうとうの呼称も様々あり、「ノシコミ、ノシイレ、ニコミ、ニゴミ」などと呼ばれている。それだけに一般的で飾り気のない普通の料理として伝えられてきたことがうかがえる。

伝統の小豆ほうとう祭り

そして、ほうとうを語る上で欠かせないのが「小豆ほうとう」である。毎年決まって7月30日には、北杜市須玉町ほくとしまつたま若神子の三輪神社で「ドンドン火祭り」、通称「小豆ほうとう祭り」が開催される。朝から集落の氏子を中心に準備し、午後からは屋台や出店で祭りを華やかに盛り立てている。夕方からは「オテク※の祓い」が執り行われ、フィナーレには参詣者全員に「小豆ほうとう」が振るまわれる。その年に

収穫した小豆と小麦粉でつくられた汁粉に上述した生麺を入れるのである。この年中行事から食文化の大切さが感じられる。

現在は食生活も変化し、あまりこれらの食文化を伝えていく機会が減りつつあるが、学校給食や公民館活動を通じ、食育活動が盛んになってきている。



▲小豆ほうとう祭りで振るまわれる小豆ほうとう

ほうとうのレシピ

- ①鍋にだし汁、一口大に切った野菜類を加え、やわらかくなるまで煮る。
- ②ほうとうを打つ。ごんばちに地粉、食塩を入れ、ぬるま湯を加えながら混ぜ、耳たぶ状を目安に滑らかになるまで150回ほどこね、濡れ布巾をかけて30分ほどねかす。
- ③再び②をこね、のし板の上で薄くのばし、幅1cmに切る。
- ④①に③のほうとうを順次加えて一煮立ちさせ、味噌を溶き入れ、ナガネギを加えて味を調える。熱いうちに器に盛る。

※オテク…お祓いのときに使う人形。

阿智神社藤まつり



阿智神社 宮司 新井俊亮

地域が愛する阿智の藤

阿智神社は倉敷市の美観地区内、鶴形山に鎮座する。鶴形山は鎮守の杜でありながら、公園としての管理を受けることになった経緯をもつ。したがって、公園施設として市の協力を得ながら自然林としての植生保存に努めている。公園としての道路管理と自然林保存という相反するように思えることのバランスをとりながら、落葉の堆積した湿気の多い土地柄を保っている。そのため、藤がよく育つのである。

なかでも「阿智の藤」と呼ばれる藤は、1956(昭和31)年、岡山県の天然記念物に指定された、公園随一の大棚に君臨している「あけぼの藤」である。幹回り約1.5m、根元周囲は約2.2mあり、同種の藤としては全国一の巨樹とされている。20m四方に枝を広げ、時季には淡紅色の花房をつける。樹齢については150年、300年と諸説あるが、一般の樹木のように年輪による算定は難しいとのことである。

藤まつりバックヤード

抹茶をたてる水屋や雅楽演奏用の舞台等は、神社関係者による手づくりである。

さらにお茶のお運びや抹茶のたて方、着物の着付けなどを練習し、神社関係者のみで接待ができるよう、おもてなしの気概で取り組んでいる。



▲雅楽の生演奏とお茶席の様子

阿智神社藤まつりとは

2000(平成12)年より、開花期に近い5月5日の「端午祭」の日に合わせ、5月1日から5日の五日間、藤祭実行委員会が中心となって「藤まつり」を行うようになった。

ゆったりとした気分で藤を觀賞してもらえよう、期間中は阿智の藤棚にお茶席を設け、総代や敬神婦人会による抹茶の接待、阿智神社雅楽部による雅楽の生演奏を行っている。

また境内の能舞台においても民族楽器の演奏や伝統芸能の披露を行い、非常に賑やかな催しとなっている。



▲親子昔遊びの様子

藤のピンチを救え！

藤は今や倉敷市の市花となり、各小学校にも植栽されて注目をあびることとなったが、もともとなった「阿智の藤」は、一時は枯死寸前に陥ったこともあった。その時、神社に所属する氏子青年会、敬神婦人会などで組織する「阿智の藤保存会」を始め、氏子有志による「あちの藤応援団」が立ち上がり、各方面からの英知と援助を結集し、樹勢回復処置を行うのである。その様子はまるでわが子を守るかのごとく、活性剤を注射、せん定、棚改修などの事業が施されたのである。そして、藤は蘇ったのだ。

鶴形山には、ここにしかない絶滅寸前の昆虫が残っており、藤のほか、エノキやムク、アベマキの木も大きく育っている。今後の鎮守の杜の保存は、自然を保存することに通じる大切な課題である。

すてき！ わたしの町

長崎県長崎市立稲佐小学校
教諭 高本 誠治



各グループの発表に対して、
感想・質問のふせんを貼る。



クイズにイラストを
描いて見やすくする。

学習の流れ（全 32 時間）

- ①町探検に行こう（8）
- ②見つけたことを教え合おう（4）
- ③町のことをもっと知ろう（2）
- ④2回目の町探検に行こう（7）
- ⑤町のすてき発表会をしよう（8）
- ⑥もっとたくさんの人に伝えよう（3）

「家で育てているへちまより大きい！」、「あの鉄塔は東京タワーに似ている！」。普段何気なく歩いている町の中で、ふと何かが目に留まる瞬間がある。それが関心や驚きにつながる。子どもたちは、これまでに獲得した知識と比べ、「前に見たものよりすごい。」や「形と色が〇〇みたい。」という認識を抱きながら、新たに発見したものを自分の記憶の中に位置付けていく。

5月、「春の町はっけん」では、八百屋と花屋にインタビューをした。「旬の果物は何ですか？」、「どの畑で採れたんですか？」、「何時ごろ送られてくるんですか？」。この時点では、「地域の人に目を向ける」、「比べる」という意識はほとんどなかった。

「すてき」とは…

す すばらしい て 手づくり き 気持ちいい

2学期は、「町のすてきを見つけよう」という単元から学習がスタートした。1回目の探検は、子どもたちの希望をもとに6グループに分かれ、1グループで3か所を回ることにした。「ばく、塾の日はいつもここに来る。」と、ある子どもが言った。塾からの帰宅コースにある日本茶販売店の中に入り、いすに腰掛けてしばらく休んでから帰宅するというのである。見ると、いすの横は、玉砂利で囲まれていて、ししおどしがあつた。「どうして？」と問いかけると、「落ち着くから。」という答えが返ってきた。つい寄ってしまう場所には、他の場所とは違うよさがある。それを認識して、自覚された気付きへとつながっていった。その子にとって「気持ちのよい場所」である。ほかにも、「果



**鮮魚店のおじさんの
1日の行動を、時計を
使って説明する。**

**洋菓子店のセールス
ポイントを説明する。**



物屋のおじさんは、いつも声をかけてくれる。」「お肉屋のおじさんは、いつもにこにこしている。」など、地域の「人」に目を向け始めた子どももいた。

見つけた「すてき」を各グループで整理し、他のグループに伝える内容を決めて、発表の準備に取りかかった。発表の方法は、子どもたちから出された、「クイズ」、「紙芝居」、「写真で説明」、「寸劇」の中から自分たちに合うものを選ぶことにした。写真で説明しながらクイズを出すなど、組み合わせで発表するグループが多かった。準備で意識させたことは、目立たせたいものがよく見えるようにすることである。クイズを選んだグループでは、イラストや写真をつけて見やすくする工夫があった。準備や練習の時間では、他のグループに答えやキーワードを聞かれたり、見られたりしないように、子どもたちどうしが気をつけ合って取り組んでいた。そして、いよいよ発表である。グループの発表を聞いた感想と質問はふせんに書いて、次の時間にグループごとの掲示板に貼った。発表のよかった点だけでなく、自分たちでは答えられない質問が出てきた。「さて、どうする?」と問いかけると、「もう1回調べに行きたい。」という声が返ってきた。

「店員さんがどんな人なのか」など、他のグループが調べていたことを、自分たちのグループは調べていないことや、ほかにもインタビューしたいことがあることに気付いてきた。2回目の探検でインタビューしたいことをまとめ始めた。2回目の探検は、一人1

か所に絞った。もっと知りたいことを調べるために、12グループに分かれて出発。「鮮魚店のおじさんは、朝早くから夜遅くまで働いている。」「化粧品屋のおばさんは、マッサージもしてくれる。」など、人それぞれの特徴、すばらしさに気付くことができた。また、中華料理屋とお弁当屋で、一人分の注文を受けてから提供するまでの時間を比べるなど、比較して考えることも促した。比べることで、お弁当屋の料理提供時間がいかに短いかが明確になった。

そして、2回目の発表。1回目の発表で他のグループの様子を見ているので、準備はスムーズだった。**鮮魚店のおじさんのアクティブさは、時計を進めながら視覚に訴えることにした。洋菓子店探検の寸劇では、店のセールスポイントを端的にまとめた。**この日は授業参観。大きな声で、保護者に発表した。ちなみに本校では、集会や始業式などで原稿を見ないで発表することがごく一般的なことになっており、上級生のそんな姿を常に目に焼き付けているのだ。そのため発表では、ほとんどの子どもが原稿を見ずに発表することができた。

「子は宝」と言われる。子どもたちを育てる土壌は、家庭であり、学校であり、地域である。周囲の方々のあたたかい人柄、気軽に声をかけてくださる町全体の雰囲気、見学依頼を快く引き受けてくださる商店街各店舗の協力体制、このように子どもたちが安心して過ごせる社会も、未来に残したい大切な宝である。



JT生命誌研究館

表現を通して生きものを考えるセクター

有馬 えり奈



はじめに

「生きているってどういうことだろう」。子どもも含め、みんなで一緒に考えたい大事なテーマだ。だが考えるのが難しいテーマでもある。「生命誌研究館」は小さな生き物の研究をし、その成果を様々な形で表現することによってこの問題を考えている場である。是非いらして子どもたちと一緒に考え、楽しんでほしい。

一つの細胞から始まる生き物たち —生命誌絵巻—

館に入ってまず目に入るのが扇形の「生命誌絵巻」。天の部分に様々な生き物が描かれている。地球上には数千万種もの生き物がいると言われ



生命誌絵巻

るが、人間が名前をつけたものはまだ130万種ほどである。ゴリラ、イモリ、キノコ、ヒマワリ…それぞれ形も生き方も違うが、みな細胞でできており、その中にゲノム(DNA)が入っているという共通性をもつ。そこでそれらは、たった一つの共通祖先をもつと考えられている。扇の要が38億年前、海中にいた祖先を表し、天に向かって進化をし、現在の豊かな生態系をつくっていく様子を描いている。多細胞生物の誕生、海から陸への進出、種の爆発などを経て、多様化した生き物はみな38億年の歴史を背負っている。ここで大切なのが、人間も扇の中に存在する生き物の一つだ

ということである。研究館の基本はここにある。

あなたの始まりも一つの細胞から —受精卵からの発生—

生き物には始まりがある。動物の個体の始まりは一つの卵。「ものみな一つの卵から」展では、水の中、陸上、母親の体内にある様々な種類



「ものみな一つの卵から」展の様子
の卵が観察でき、卵から体の形ができる様子を映像で楽しめる。魚のえらをつくる咽頭嚢が四足動物では耳の一部や副甲状腺となる、ちょっと難しい話もパズルで楽しみながら考えられる。発生の過程は共通なのに、生物によって暮らす環境に合った器官になるなど、体づくりの不思議は館内のいくつかの場所でも紹介しているので連動して見ていただきたい。

新たな時代を切り開く「上陸大作戦」

生命の歴史38億年のうち、約33億年はすべての生き物が海で暮らしていた。まず植物が上陸し、昆虫、脊椎動物の順



「生きものの上陸大作戦」展の様子
に後を追うのだが、住み慣れた海から新天地への旅は試行錯誤の連続である。「生きものの上陸大作戦」展では、

5億年間のできごとを絵巻で表現している。花ができるしくみを知る模型や、昆虫の翅の起源を追う映像コーナー、四肢の進化を考える古代魚の化石など、さわって楽しめる展示で、現在の豊かな生態系をつくり上げるまでの様子が見える。

館の人気者は肺魚とナナフシ。肺はあまり発達せずえら呼吸に頼る「アボカドくん」と、一對の肺をもつ「えんぴつくん」の2種類の肺魚がいる。「アボカドくん」は四足動物の祖先が上陸する前(4億年前)の姿と変わらない生きた化石だ。「えんぴつくん」は30分から1時間に1回、水面上が



肺魚

り、肺呼吸をする姿を見せてくれる。鰭から脚へ、えら呼吸から肺呼吸への変化が実感できる。枝に似た昆虫のナナフシは、特に誕生間もない小さい個体がかわいい。巨大ナナフシの標本や、再生した脚を展示している。

進化をたどる冒険へ、エルマーとご一緒に

有名な『エルマーのぼうけん』(ルース・スタイルス・ガネット作)では、主人公のエルマーが、サイやゴリラ、ライオンなど様々な生き物に出会いながら、捕らえられている子どものリュウを助けて空を飛ぶ。「エルマー・バイオヒストリーの冒険～鳥になったリュウ」展では、助けるのは恐竜である。海の中の魚の一部が上陸し、両生類や虫類、ほ乳類へと進化し、それぞれに多様化した。は虫類の仲間から生まれた恐竜は絶滅したとされているが、実は鳥につながっている。恐竜が絶滅しなければ、ほ乳類の繁栄はなく、わたしたち人類は誕生しなかっただろう。原作者も気に入ってくださった見事なジオラマを見ながら、進化の面白さを考えてみよう。



「エルマー・バイオヒストリーの冒険～鳥になったリュウ」展の様子

かわり合いの中で生きる 一研究成果の紹介

チョウの例を紹介する。ナミアゲハは必ずミカン科の葉に卵を産む。幼虫がそれしか食べないからだ。母チョウが植物を見分けるしくみを明らかにした研究は世界で高く評価された。4階にある「食草園」は、ミカンやカタバミ、アシタバなど身近な食草



ナミアゲハの幼虫

を植えて、チョウの訪れを待ち、観察の場となっている。この庭で、生き物の自然の姿をじっくり観ると、「なぜ？」が溢れてくる。日常と研究をつなぐ場は、「なぜ？」をたくさん発見する場である。

命を愛づる 一日本の文化を踏まえて

平安時代の「蟲愛づる姫君」は、チョウが幼虫から成虫になる様をじっくりと観察し、生き物の本質を知ろうとする心を千年も前にもっていた。生き物をただかわいがるのではなく、「生きている」とまっすぐに向き合うときに生まれる「愛



ガイドスタッフによる展示の説明

づる」心。「蟲愛づる姫君」展では、姫君の物語と、「愛づる」心をもちながら、チョウ、クモ、ハチ、カエルなど身近な生き物の研究を行う当館の研究者の物語を重ねて紹介している。卵(一つの細胞)がクモやカエルそれぞれの形をつくる過程、昆虫の多様化や植物とのかかわり合い、チョウの食草選択など、どれも興味深い。通常、研究や実験の様子を見ていただくことはできないが、関心のある方は催しを利用してほしい。年に3回の実験室見学ツアーでは、研究者と話をし、実験を体験できる。1か月前までの予約で、ガイドスタッフと一緒に展示ホールをめぐることもできる。ホームページでの情報発信にも力を入れているので、是非サイトに入り、館の状況や館員の日記などを読み、書き込みをしてくださるとうれしい。

わたしの学校の特色

さだみつ

徳島県つるぎ町立貞光小学校

—地域とともにある学校—

校長 小倉 健司

本校は、徳島県を東西に流れる吉野川の中流部に位置し、JR徳島線貞光駅の近くにあり、霊峰剣山つるぎさんの玄関口に開けた、山と川に囲まれ、自然豊かな環境に恵まれた場所である。

つるぎ町は、平成17年度に、貞光町・半田町・一字村が合併してできた町である。少子高齢化の影響で、児童数は年々減少し、現在は181名であるが、人情豊かで子どもたちを大切にしている町である。



本校の外観

十六地蔵尊を通しての交流

本校では、隣接する真光寺において、毎年1月29日に行われる十六地蔵尊法要みみお かじまに参加している。この法要は、大阪市南恩加島国民学校（現在の大阪市立南恩加島小学校）から疎開をしていて、火災により尊い命を落とした16名の子どもたちを供養している。戦後70年、戦争の惨禍が日々風化していく中、本校の子どもたちと教職員一同は、毎年この法要に参加し平和への思いを新たにしている。また、十六地蔵尊法要を通して、平和や命の尊さ、戦争の悲惨さを理解するとともに、南恩加島小学校と貞光小学校が修学旅行で互いの

学校を訪問し合う交流をつづけている。



十六地蔵尊法要

農業体験を基盤にした食育指導

地域の方々の協力で、学年ごとに農業体験をしている。この農業体験を基盤にした食育指導を通して、子どもたちは、作物を育てることへの楽しさや食べ物に対する知識が広がり、学校給食への関心も深まってきた。また、生産者と交流をすることにより、生産者や食べ物に対し、感謝の気持ちをもつようになった。学校給食の食材は、地域の産物を使用し、伝統的な料理が提供されている。それにより、地域の文化や伝統に対する理解や関心も一段と深まっている。これからも、地域からの支援に感謝しながら、「この町大好き」な子どもたちの育成に努めていきたい。



2年生・ジャガイモの収穫



好評
発売中

日文の書籍シリーズ



新 教師へのとびら 小学校教師の基礎・基本

群馬大学教育学部附属小学校教育研究会を編著者として、教育実習生の手引きとなることを目的に編集。教材研究の方法、指導案の書き方、授業のしかたがわかり、若手教師にも役立つ。

編著 群馬大学教育学部附属小学校教育研究会

定価 **2,430**円 (本体2,250円+税8%)

A4判 192頁 ISBN978-4-536-60077-4



生活科の理論と実践

—「生きる力」をはぐくむ教育のあり方—

生活科誕生より約20年、その歴史を振り返り、今一度生活科の本質を改めて見直し、新しい生活科の姿、教科特性を論じる。理論を具体的に補完する実践例も収録。若手からベテラン教師まで必携の一冊。

編著 木村吉彦 (上越教育大学大学院)

定価 **2,160**円 (本体2,000円+税8%)

A5判 240頁 ISBN978-4-536-60058-3

お求めは、書店、ブックサービスをお願い致します。

※商品のお問い合わせは、お手数ですが、裏面所在地より小社大阪本社業務部へお願い致します。

スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる!

- 1 スマートフォンまたはタブレットで、ストアアプリを起動します。
- 2 「カザスマート」で検索し、アプリをダウンロード。
- 3 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
- 4 マークがあるページで紙面全体にかざすと、動画が始まります!



★表紙裏 (い〜め〜る), P.26 (ご当地料理紹介), P.27 (わが町オススメ行事) で視聴できます。

※動画は、2015年12月31日まで視聴することができます。

Dr.小林の これなあに?

写真の達人、小林先生が、撮りためた写真の中から
とっておきを紹介します！



小林 辰至

上越教育大学大学院 教授。
1952年、岡山県生まれ。専門
は理科教育学。タンポポの教材
化に関する研究で、兵庫教育大
学から博士(学校教育学)を取得。
散歩に出かけて足もとの自然を
カメラにおさめるのが趣味。

ツリフネソウ

ツリフネソウは、ハウセンカの仲間です。花の形が船を釣り下げたようになっているところからそう呼ばれています。日本各地の山地や平地のやや湿った薄暗い場所に生えています。花は、夏から秋にかけて咲きます。



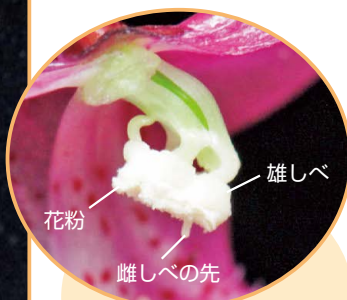
①群がって咲いている様子



②花を横から見た様子



③花を半分に切ってみました。左の丸まったところに蜜があります。



④雌しべと雄しべです。昆虫が蜜を求めて花の中に入るとき、背中に花粉が付きます。



⑤別の花で蜜を吸ってきたのでしょうか。背中に花粉を付けたハチが花の中に入ろうとしています。



⑥左は果実が弾けて種子を飛ばした後の様子。右は成熟前の果実



⑦果実から飛び出した種子

小林先生への質問、ご感想、先生の写真を授業で使いたい！
などなど、お待ちしております。

日本文教出版 HP → 問い合わせフォーム もしくは、連絡先を記入の上、
FAX (03-3389-9359, 生活科編集部宛) にてお寄せください。

生活&総合 *navi* vol.71

日文教育資料[生活・総合]

平成 27 年(2015年)9月30日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

表紙イラスト にしだ さとこ

CD33286

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690